

# 京都府の財務書類

～ 平成30年度決算 ～

( 一般会計等財務書類 )

# 京都府の財務書類（平成30年度決算）

## 1. はじめに（これまでの取組みと地方公会計制度への対応）

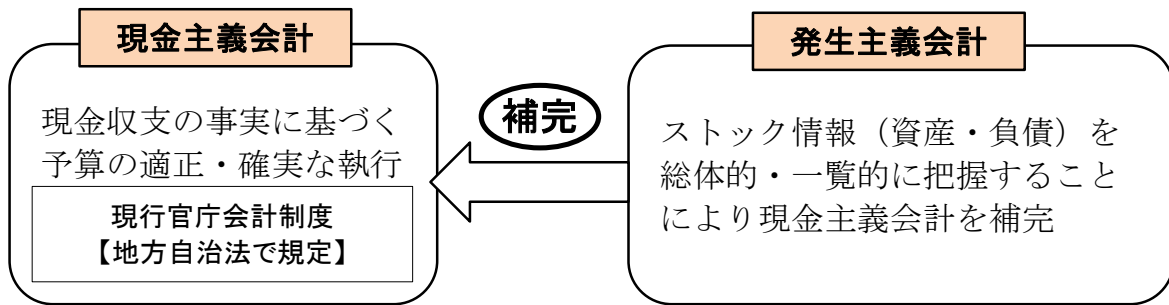
本府では、普通会計におけるストック情報としての資産と負債の状況を明らかにするため、平成14年度より「貸借対照表」及び「行政コスト計算書」の作成、公表を行い、平成20年度決算からは、よりわかりやすい財務情報を提供するため、「総務省方式改訂モデル」に基づき、「純資産変動計算書」及び「資金収支計算書」を加えた財務書類4表の作成、公表を行ってきました。

さらに、平成28年度決算からは、新たに国から示された固定資産台帳の整備と複式簿記の導入を前提とした「統一的な基準による地方公会計」に基づく財務書類4表の作成、公表を行っています。

## 2. 統一的な基準による地方公会計とは

統一的な基準による地方公会計は、現金主義会計による予算・決算制度を補完するものとして、現金主義会計では見えにくいコストやストックを把握することで中長期的な財政運営への活用の充実や統一的な基準の導入による比較可能性を高めることを目的として、作成するものです。

### (1) 地方公会計の意義



- ① 見えにくいコスト（減価償却費、引当金など）の把握が可能
- ② ストック情報（資産・負債）の一覽的把握が可能

→ 財務情報のわかりやすい開示、財政運営の基礎資料としての活用

### (2) 制度の比較

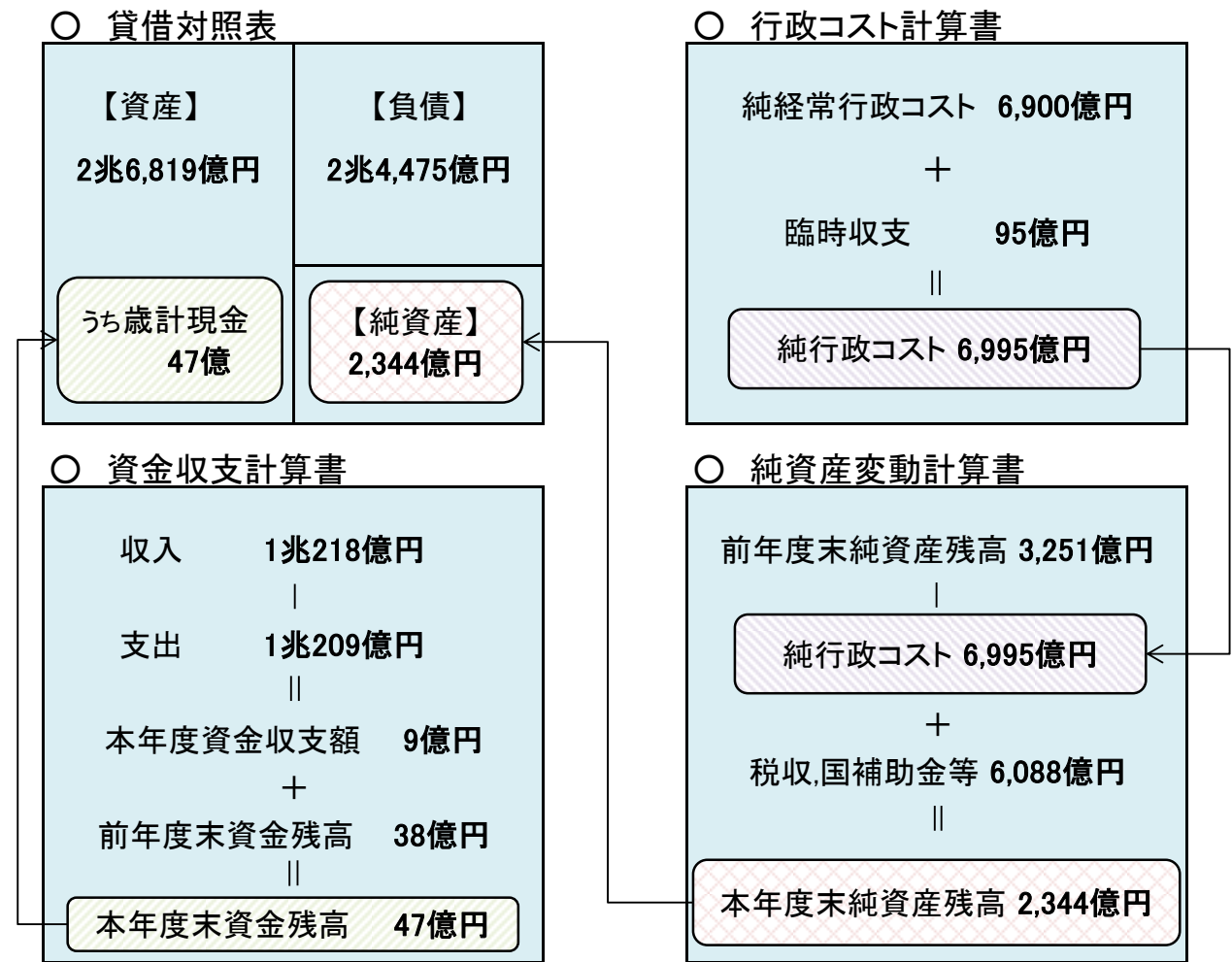
	統一的な基準 (28年度決算以降)	総務省方式改訂モデル (27年度決算以前)
発生主義・複式簿記の導入	決算の歳入歳出情報を原則、 個々に複式仕訳	地方財政状況調査（決算統計） データを活用し作成
固定資産台帳の整備	固定資産台帳を整備し、個々の 資産の取得価格、耐用年数、減 価償却費等を管理	地方財政状況調査（決算統計） で普通建設事業費と区分された 経費を固定資産として計上
比較可能性の確保	全国の自治体が統一的な基準に 沿って作成	総務省方式改訂モデル以外にも 基準モデルや独自モデルが存在

### 3. 財務書類について

#### (1) 財務書類の内容

財 務 書 類	説 明
貸 借 対 照 表	年度末時点における土地や建物などの「資産」や府債などの「負債」に係るストック情報を表示
行政コスト計算書	当該年度の行政活動において、資産形成に結びつかない行政サービスに要した費用（行政コスト）とその行政サービスの対価としての使用料及び手数料等の収益の情報を表示
純資産変動計算書	貸借対照表の「純資産（資産と負債の差）」が1年間でどのように増減したのかの情報を表示
資金収支計算書	年間の資金の流れ（収支）について、その性質に応じて区分した情報を表示

#### (2) 財務書類の相関図



### (3) 財務書類の対象範囲

他団体との比較可能性の観点から、総務省の地方財政状況調査（決算統計）でも用いられる普通会計ベースの財務書類を作成します。

作成範囲	説明
一般会計等財務書類 (普通会計財務書類)	一般会計 特別会計：営林事業、母子及び父子並びに寡婦福祉資金貸付事業、農業改良資金助成事業等、中小企業経営基盤強化資金助成事業、公共用地先行取得事業、公債費特別会計

### (4) 作成基準日

平成31年3月31日現在

ただし、出納整理期間（4月1日～5月31日）における出納については、貸借対照表の基準日までに終了したものとして処理しています。

### (5) 国の動向等

財務書類の情報を資産管理や予算編成に活用するため、国においては、活用の具体的な方法の検討及び先進事例の収集等を行っているところです。

財務書類の分析においては、一定程度の経年比較データの蓄積が必要と考えており、数年は、データ蓄積と他府県比較を行いながら、どのような形で活用が可能かを検討していきたいと考えております。

#### 4. 貸借対照表～年度末時点における資産や負債に係るストック情報を明らかにするもの～

平成31年3月31日現在の「資産」の総額は2兆6,819億円、「負債」の総額は2兆4,475億円、「資産」と「負債」の差である「純資産」は2,344億円で、資産に対する負債の総額は91.3%となっております。

資産の部では、道路や河川等のインフラ資産と庁舎等の事業用資産等の有形固定資産で2兆2,892億円と資産全体の85.4%を占めており、一方、負債の部では、翌年度償還予定額を含めた地方債残高が2兆2,675億円と負債全体の92.6%を占めています。この地方債残高には、臨時財政対策債をはじめとした、後年度に地方交付税で財源措置される1兆2,132億円が含まれています。

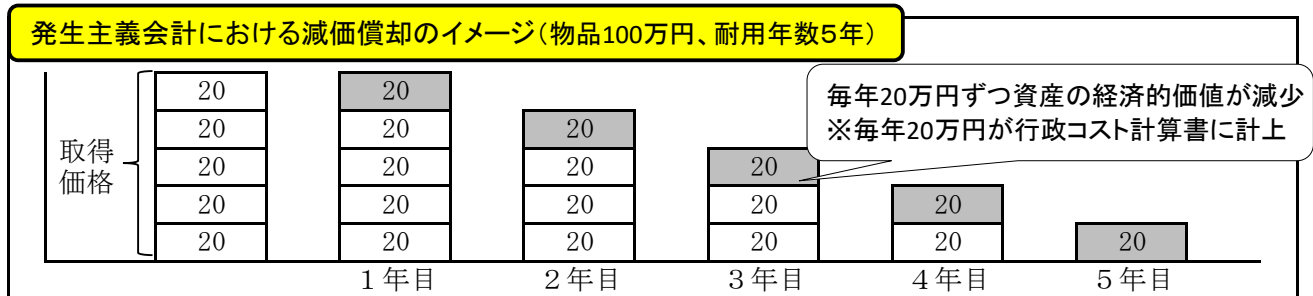
昨年度と比べ、府債管理基金の積立などにより基金は約138億円増加しましたが、道路や河川等の資産償却により有形固定資産が約604億円減少したことなどにより、資産は約522億円減少しました。一方で、地方債が約432億円増加したことなどにより、負債は約385億円増加しました。

資産の部	金額 (億円)		各費目(平成30年度末)の摘要
	30年度末	29年度末	
<b>1 有形固定資産</b>	22,892	23,496	<b>固定資産</b>
(1) 事業用資産	10,258	10,127	府庁舎や学校など行政サービスに供される資産
(2) インフラ資産	50,945	50,763	道路・河川・公園などの資産
(3) 物品	535	537	50万円以上の物品 (研究機器等)
(4) 減価償却累計額	▲ 38,846	▲ 37,931	(1)～(3)の減価償却累計額
<b>2 無形固定資産</b>	7	9	ソフトウェア (税務支援システム等)
<b>3 投資その他の資産</b>	3,380	3,237	公社や第三セクター等への府の出資額及び出資割合が25%以上の団体等の財政悪化に備えた引当金の合計額
(1) 投資及び出資金	1,111	1,148	令和2年度以降に償還期限が到来する貸付金 (高等学校等修学資金等)
(2) 長期貸付金	431	425	1年以上保有する見込みの基金 (府債管理基金等)
(3) 基金	1,804	1,628	納期限から1年以上経過した税等の未収金
(4) 長期延滞債権	35	38	徴収不能引当金等
(5) その他	▲ 1	▲ 2	
<b>4 流動資産</b>	540	599	<b>流動資産</b>
(1) 預金現金	87	75	歳計現金、歳計外現金
(2) 未収金	21	21	税等の未収金のうち30年度分
(3) 短期貸付金	40	73	令和元年度に償還期限が到来する貸付金
(4) 基金	393	431	1年未満に取り崩す可能性のある基金 (府債管理基金等)
(5) その他	▲ 1	▲ 1	徴収不能引当金及び基金運用利子
<b>資産合計 (A)</b>	<b>26,819</b>	<b>27,341</b>	

※貸借対照表に計上している資産には、所有者と管理者が異なる資産(3桁国道、1級河川等)3,348億円は含んでいません。

負債の部	金額 (億円)		各費目(平成30年度末)の摘要
	30年度末	29年度末	
<b>1 固定負債</b>	<b>23,608</b>	<b>23,209</b>	<b>固定負債</b>
(1) 地方債(長期)	22,039	21,580	令和2年度以降に償還期限が到来する地方債
(2) 長期未払金	3	3	既に物件の引渡しを受けたが未支払のもの(PFI)
(3) 退職手当引当金	1,551	1,611	在職する職員が退職した場合に必要な退職手当
(4) 損失補償等引当金	10	8	財政健全化法に基づく将来負担比率の算定において計上された三セク等に係る将来負担
(5) その他	5	7	
<b>2 流動負債</b>	<b>867</b>	<b>881</b>	<b>流動負債</b>
(1) 地方債(短期)	635	662	令和元年度に償還期限が到来する地方債
(2) 未払費用	29	29	地方債の利払金(令和元年度期限到来分のうち30年度期間分)
(3) 賞与等引当金	155	147	令和元年度支給賞与のうち30年度発生分
(4) その他	48	43	
<b>負債合計(B)</b>	<b>24,475</b>	<b>24,090</b>	<b>純資産</b>
<b>純資産(A-B)</b>	<b>2,344</b>	<b>3,251</b>	資産合計(保有資産) - 負債合計(将来負担)
<b>負債及び純資産合計</b>	<b>26,819</b>	<b>27,341</b>	

※地方債(長期及び短期)に含まれる臨時財政対策債の金額は8,593億円です。



府民1人当たりの貸借対照表

<b>資産</b> (保有資産) <b>1,050千円</b>	<b>負債</b> (将来負担) <b>958千円</b>
	<b>純資産</b> (これまでの負担) <b>92千円</b>

※人口2,555,068人(住民基本台帳人口H31.1.1現在)

## 5. 行政コスト計算書～年間の経常的な活動に伴うコストや収入等の情報を明らかにするもの～

経常費用7,166億円に対して、使用料・手数料等の経常収益の総額は266億円となっており、差引きの純経常行政コストは6,900億円となっています。

これに、出資金評価損や災害復旧事業等に伴う臨時損失98億円、資産売却等に伴う臨時利益3億円を含んだ純行政コストは6,995億円となり、地方税や地方交付税等で賄う必要があります。

また、府民1人あたりの費用は284千円、収益は10千円で、純行政コストは274千円となっています。

区分	金額 (億円)		
	30年度末	29年度末	
<b>経常費用</b>	7,166	7,399	
1 業務費用	4,005	3,933	
(1) 人件費	2,161	2,131	
①職員給与費	1,794	1,804	職員の給与
②賞与等引当金繰入額	155	146	賞与等引当金の30年度発生額
③退職手当引当金繰入額等	139	109	退職手当引当金の30年度発生額
④その他	73	72	非常勤嘱託等への報酬等
(2) 物件費等	1,647	1,589	
①物件費	467	445	委託料や消耗品といった消費的性質の経費
②維持補修費	238	177	資産の機能維持のために必要な修繕費等
③減価償却費	942	967	耐用年数に基づく資産価値減少金額
(3) その他の業務費用	197	213	
①支払利息	172	188	地方債等に係る利息負担額
②その他	25	25	
2 移転費用	3,161	3,466	
(1) 補助金等	2,833	3,240	税交付金、社会保障給付府負担分等(市町村や民間への補助金等)
(2) 社会保障給付	116	138	社会保障給付としての扶助費等
(3) 他会計への繰出金等	212	88	他会計への繰出金に係る費用等
<b>経常収益</b>	266	269	
使用料・手数料等	266	269	一定の財・サービスを提供する場合に当該対価として使用料・手数料の形態で徴収する金銭
<b>純経常行政コスト</b>	<b>6,900</b>	<b>7,130</b>	

### 各費目(平成30年度末)の摘要

#### 経常費用・経常収益

職員の給与

賞与等引当金の30年度発生額

退職手当引当金の30年度発生額

非常勤嘱託等への報酬等

委託料や消耗品といった消費的性質の経費

資産の機能維持のために必要な修繕費等

耐用年数に基づく資産価値減少金額

地方債等に係る利息負担額

税交付金、社会保障給付府負担分等(市町村や民間への補助金等)

社会保障給付としての扶助費等

他会計への繰出金に係る費用等

一定の財・サービスを提供する場合に当該対価として使用料・手数料の形態で徴収する金銭

各費目(平成30年度末)の摘要

区分	金額(億円)		
	30年度末	29年度末	
<b>臨時損失</b>	98	15	
1 災害復旧事業費	22	10	災害復旧に関する費用
2 資産除売却損	5	2	資産売却収入が帳簿価額を下回る場合の差額
3 損失補償引当金等繰入額等	71	3	損失補償引当金の30年度発生額等
<b>臨時利益</b>	3	376	
1 資産売却益等	3	3	資産売却収入が帳簿価額を上回る場合の差額
2 その他	0	373	上記以外の臨時利益
<b>純行政コスト</b>	<b>6,995</b>	<b>6,769</b>	

府民1人当たりの行政コスト計算

区分	金額	区分	金額
1 業務費用	156千円	1 使用料及び手数料	10千円
(1)人件費	84千円	経常収益 C	10千円
(2)物件費等	64千円	臨時利益 D	0千円
(3)その他の業務費用	8千円		
2 移転費用	124千円		
経常費用 A	280千円		
臨時損失 B	4千円	純行政コスト A+B-C-D	274千円

※人口2,555,068人(住民基本台帳人口H31.1.1現在)



## 6. 純資産変動計算書～年間の純資産（資産－負債）の増減について明らかにするもの～

前年度末純資産残高は3,251億円であり、純資産の減少要因としては行政コスト計算書に掲げた純行政コストとして6,995億円が、純資産の増加要因としては税金等が5,408億円、国補助金725億円等が計上され、本年度末純資産残高は2,344億円となっています。

区分	金額（億円）		各費目（平成30年度末）の摘要
	30年度末	29年度末	
前年度末純資産残高	3,251	3,694	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"><b>純資産増減</b></div> 行政コスト計算書の純行政コストと一致し、純資産の減少要因となったもの 地方税、地方交付税及び地方譲与税等 国庫支出金 保有する資産（出資金）の評価差額 国民健康保険財政安定化基金の他会計への振替等
純行政コスト(▲)	6,995	6,769	
財源	6,133	6,253	
税金等	5,408	5,493	
国等補助金	725	760	
本年度差額	▲ 862	▲ 516	
資産評価差額	▲ 4	3	
その他	▲ 41	70	
本年度純資産変動額	▲ 907	▲ 443	
本年度末純資産残高	2,344	3,251	

## 7. 資金収支計算書～年間の資金の増減について明らかにするもの～

業務活動収支については、収入が業務収入と臨時収入で6,157億円、支出が業務支出と臨時支出で6,300億円となり、143億円の不足が生じています。投資活動収支では279億円の不足となりましたが、財務活動収支では431億円の黒字となった結果、本年度末の資金残高は9億円増加しました。

区分	金額（億円）		各費目（平成30年度末）の摘要
	30年度末	29年度末	
<b>1 業務支出</b>	<b>6,278</b>	<b>6,487</b>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"><b>業務活動収支</b></div> 人件費に係る支出 物件費等に係る支出 地方債等に係る支払利息の支出 補助金等に係る支出 社会保障給付に係る支出 他会計への繰出金に係る支出等
業務費用支出	3,117	3,021	
人件費支出	2,213	2,185	
物件費等支出	705	623	
支払利息支出等	199	213	
移転費用支出	3,161	3,466	
補助金等支出	2,833	3,240	
社会保障給付支出	116	138	
他会計への繰出支出等	212	88	

区分	金額 (億円)		各費目(平成30年度末)の摘要
	30年度末	29年度末	
<b>2 業務収入</b>	6,113	6,209	
税金等収入	5,404	5,489	税金等の収入
国等補助金収入	443	459	国庫支出金のうち業務支出財源に充当した額
使用料及び手数料収入等	266	261	使用料及び手数料に係る収入
<b>3 臨時支出</b>	22	10	災害復旧に係る支出
<b>4 臨時収入</b>	44	6	災害復旧に係る国庫負担金
<b>業務活動収支</b>	<b>▲ 143</b>	<b>▲ 282</b>	
<b>1 投資活動支出</b>	1,830	2,024	
公共施設等整備費支出	362	293	有形固定資産等の形成に係る支出
基金積立金支出	742	715	基金積立に係る支出
投資及び出資金支出	7	6	投資及び出資金に係る支出
貸付金支出等	719	1,010	貸付金に係る支出等
<b>2 投資活動収入</b>	1,551	1,793	
国等補助金収入	238	295	国庫支出金のうち投資活動支出財源に充当した額
基金取崩収入	554	478	基金取崩しに係る収入
貸付金元金回収収入	745	1,009	貸付金に係る元金回収収入
資産売却収入等	14	11	資産売却に係る収入
<b>投資活動収支</b>	<b>▲ 279</b>	<b>▲ 231</b>	
<b>1 財務活動支出</b>	2,079	1,980	
地方債償還支出等	2,079	1,980	地方債の償還等
<b>2 財務活動収入</b>	2,510	2,468	
地方債発行収入等	2,510	2,468	地方債発行による収入等
<b>財務活動収支</b>	<b>431</b>	<b>488</b>	
<b>本年度資金収支額</b>	<b>9</b>	<b>▲ 25</b>	
<b>前年度末資金残高</b>	<b>38</b>	<b>63</b>	
<b>本年度末資金残高</b>	<b>47</b>	<b>38</b>	

## 8. 財務書類からわかる各種財政指標

### 貸借対照表を活用した分析

貸借対照表を活用した財務分析として代表的な指標は以下のとおりです。

有形固定資産減価償却率	<p>有形固定資産のうち、償却資産の取得価額等に対する減価償却累計額の割合を算出することにより、耐用年数に対して資産の取得からどの程度経過しているのかを全体として把握し、比率が高いほど減価償却が進んでいる（＝老朽化が進んでいる）ことを表します。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="text-align: right;">減価償却累計額</td> <td style="text-align: right;">38,846</td> <td rowspan="2" style="text-align: center; vertical-align: middle;">× 100 =</td> <td rowspan="2" style="text-align: right; vertical-align: middle;"><b>74.4 %</b></td> </tr> <tr> <td style="text-align: right;">有形固定資産取得価額</td> <td style="text-align: right;">52,227</td> </tr> </table> <p style="text-align: right; margin-top: 5px;">(前年度 72.6 %)</p> </div>	減価償却累計額	38,846	× 100 =	<b>74.4 %</b>	有形固定資産取得価額	52,227
減価償却累計額	38,846	× 100 =	<b>74.4 %</b>				
有形固定資産取得価額	52,227						
純資産比率	<p>資産に対する純資産の比率であり、純資産の変動は、将来世代と過去及び現世代との間で負担の割合が変動したことを表します。たとえば、純資産の増加は、過去及び現世代の負担によって将来世代も利用可能な資源を蓄積したことを意味する一方、純資産の減少は、将来世代が利用可能な資源を過去及び現世代が費消して便益を享受していると捉えることができます。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="text-align: right;">純資産</td> <td style="text-align: right;">2,344</td> <td rowspan="2" style="text-align: center; vertical-align: middle;">× 100 =</td> <td rowspan="2" style="text-align: right; vertical-align: middle;"><b>8.7 %</b></td> </tr> <tr> <td style="text-align: right;">資産合計</td> <td style="text-align: right;">26,819</td> </tr> </table> <p style="text-align: right; margin-top: 5px;">(前年度 11.9 %)</p> </div>	純資産	2,344	× 100 =	<b>8.7 %</b>	資産合計	26,819
純資産	2,344	× 100 =	<b>8.7 %</b>				
資産合計	26,819						
将来世代負担比率	<p>有形固定資産などの社会資本等に対する地方債残高の割合を算出し、将来返済しなければならない地方債によってどの程度の資産が形成されているのかを明らかにすることで将来世代の負担割合を表します。</p> <p>※30年度決算から計算式が変更となっています          &lt;変更内容&gt;①地方債残高から地方財政の財源不足を補うために発行される臨時財政対策債等の特例的な地方債を控除          ②社会資本形成に資するものに対する割合とするため、分母を総資産から有形・無形固定資産に限定</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="text-align: right;">地方債残高</td> <td style="text-align: right;">14,291</td> <td rowspan="2" style="text-align: center; vertical-align: middle;">× 100 =</td> <td rowspan="2" style="text-align: right; vertical-align: middle;"><b>62.4 %</b></td> </tr> <tr> <td style="text-align: right;">有形・無形固定資産合計</td> <td style="text-align: right;">22,899</td> </tr> </table> <p style="text-align: right; margin-top: 5px;">(前年度 59.5 %)</p> </div>	地方債残高	14,291	× 100 =	<b>62.4 %</b>	有形・無形固定資産合計	22,899
地方債残高	14,291	× 100 =	<b>62.4 %</b>				
有形・無形固定資産合計	22,899						
歳入額対資産比率	<p>歳入総額に対する資産の比率であり、これまでに形成されたストックである資産に何年分の歳入が充当されたかを表します。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="text-align: right;">資産合計</td> <td style="text-align: right;">26,819</td> <td rowspan="2" style="text-align: center; vertical-align: middle;">=</td> <td rowspan="2" style="text-align: right; vertical-align: middle;"><b>2.6 年</b></td> </tr> <tr> <td style="text-align: right;">歳入総額</td> <td style="text-align: right;">10,256</td> </tr> </table> <p style="text-align: right; margin-top: 5px;">(前年度 2.6 年)</p> </div>	資産合計	26,819	=	<b>2.6 年</b>	歳入総額	10,256
資産合計	26,819	=	<b>2.6 年</b>				
歳入総額	10,256						

## 行政コスト計算書を活用した分析

行政コスト計算書を活用した財務分析として代表的な指標は以下のとおりです。

受益者負担比率	<p>行政コスト計算書における経常収益は、いわゆる受益者負担の金額であるため、経常収益の行政コストに対する割合を算定することで、行政サービスの提供に対する受益者負担割合を表します。</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 10px; margin: 10px auto; width: fit-content;"><table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"><tr><td style="text-align: right; padding-right: 20px;">経常収益</td><td style="text-align: right; padding-right: 20px;">266</td><td style="text-align: center;">—</td><td style="text-align: center;">× 100 =</td><td style="text-align: right; padding-right: 10px;"><b>3.7 %</b></td></tr><tr><td style="text-align: right; padding-right: 20px;">経常費用</td><td style="text-align: right; padding-right: 20px;">7,166</td><td></td><td style="text-align: center;">(前年度</td><td style="text-align: right; padding-right: 10px;">3.6 %)</td></tr></table></div>	経常収益	266	—	× 100 =	<b>3.7 %</b>	経常費用	7,166		(前年度	3.6 %)
経常収益	266	—	× 100 =	<b>3.7 %</b>							
経常費用	7,166		(前年度	3.6 %)							